

## 7. 早稲田大学における多様性重視と個性尊重—安部磯雄を中心に

矢口徹也  
教育・総合科学学術院

### 1. はじめに

早稲田大学におけるダイバーシティ推進は、国籍、性別、障がいの有無などに関わらず多様な個性が活躍できる環境を醸成し、それによって大学全体が新たな発想を生み出していくことを目的にしている。ダイバーシティという語は近年よく耳にするが、本学にとっては決して新しい考え方ではなく、むしろ伝統と言ってよい。本学の創立者である大隈重信は、強い信念と独立心を持った人材の育成を重視し、教員にも個性豊かな人物を大学に迎え入れた。本日はそうした人物の一人として安部磯雄を取り上げ、本学のダイバーシティについて考えてみたい。

### 2. 安部磯雄とはどんな人物か—学生スポーツの奨励

安部磯雄は1865年に福岡で生まれた。同志社英学校に進学、卒業後はハートフォード神学校、ベルリン大学に留学した。帰国後は同志社の教員となり、1899年に早稲田大学の前身である東京専門学校の教員になった。安部は、図書館長、初代政治経済学部長を務め、野球部部長、庭球部長、交響楽団会長等を担当した。学外では大日本体育協会を創立、東京六大学野球連盟の発足に尽力し、近代日本の文化とスポーツの発展に寄与した。なかでも、スポーツとして野球を定着させた功績は大きく「学生野球の父」、「日本野球の父」と称され、戦後、野球殿堂博物館設立と同時に殿堂入りしている（特別表彰）。



#### 安部の運動面、文化面での足跡

- 1901年 早大体育部長、野球部初代部長
- 1902年 雄弁会初代会長
- 1903年 庭球部初代部長、音楽部初代部長
- 1905年 野球部合衆国遠征（野球史上初の海外遠征）
- 1911年 大日本体育協会 総務理事
- 1915年 競走部初代部長
- 1930年 東京六大学野球連盟初代会長
- 1946年 日本学生野球協会初代会長
- 1949年 早大グラウンド「安部球場」、「安部寮」
- 1959年 日本野球殿堂入り（特別表彰）

野球に関するエピソードを紹介したい。1905年4月、早大野球部は横浜港からアメリカにむけて出発した。日本初のスポーツ海外遠征である。きっかけは、安部が学生たちに、一高、慶應、学習院との対抗試合で全勝したらアメリカに連れて行くことと約束したことだった。奮起した学生は全勝し、周囲の教授達は唖然としたが、安部は大隈に直接掛け合い5,500円という巨額の費用を確保し

て遠征を実現した。この遠征は、日露戦争の最中、日本海海戦の前月のことであり、戦況に注目していた世論を考えると、まさに破天荒の試みだったが、学生の国際交流の先駆となり、アメリカの科学的野球理論を日本にもたらして、今日に至る日本野球発展の礎になった。遠征実現の背景には、学生たちに「世界」を見せたいという大隈の念願があり、一方、若者は戦争ではなくスポーツによって競い、交流するものという安部の理想があった。



早稲田大学野球部第1回渡米記念 (1905・明治38)

### 3. 貧困救済と男女平等

安部は同志社で新島襄から受洗したクリスチャンであり、貧困と差別解消に取り組んだ社会主義者としても知られている。彼は明治維新によって困窮する士族の家に生まれ、出生直後には他家の養子となった。同志社で経済学を学び、貧富の懸隔という社会問題に目を開かれた。1898年に片山潜、幸徳秋水と社会主義協会を結成し、日露戦争での非戦平和、貧困救済、足尾銅山問題、女性解放、公娼廃止、産児制限運動などに取り組んだ。キリスト教的人道主義、社会主義者としての安部の思想の背景には、古い家制度の下で後妻として苦勞した母親の姿もあったと言われている。

戦後の教育制度が成立するまで、日本では、女性の高等教育機関への進学は極めてまれなことだった。女性の教育機会は小学校、高等女学校、師範学校、専門学校、女子高等師範学校であった。こうした中で、早稲田大学には女性の高等教育に熱心に取り組んだ先人たちが多く存在する。例えば、大隈重信は1901年の日本女子大学校創設を創立委員長として担い、1905年には津田梅子を大隈邸に招き、日本YWCAが発足している。1915年には当時文部大臣だった高田早苗(第三代総長)が女子の大学入学について諮詢した。安部は、戦前日本の代表的な婦人解放運動家である福田英子が1907年創刊した雑誌『世界婦人』に論考を寄稿し、1910年には『婦人の理想』を著し、婦人の自立と教育について論じている。矢島楯子、ガントレット恒たちによる婦人矯風会も支援した。

安部の男女平等や女性の権利論を紹介しておきたい。男女平等については「男女不平等は一種の妄信」であるとし、「我国の男子は婦人を侮辱し婦人は男子を軽蔑す」と述べている。女性参政権については「婦人参政権に反対する人は非立憲的」とその実現を支持した。戦前は、女性が夫以外の男性と関係を持つと姦通罪に問われ離婚請求の原因とされたが、男性の場合は誰かの妻と関係を持

たない限り姦通罪には該当せず離婚請求の原因にもならなかった。安部は「男子の不貞は女子に対して致命的なり」と述べて、姦通罪と離婚請求権を両性に適応することを主張した。公娼制度については「存娼論者は人類なるものを見とめず、道徳を置かざる」としてその廃止を主張した。また、「女子は必ず結婚せねばならぬという考えをやめよ」と結婚・再婚に関する女性の自己決定の尊重を訴えた。他にも、同一労働同一賃金の確立や産児制限の推進を主張した。

女性の教育に関して、「男子の多数は無学にして従順なる女子を要求す」と指摘し、男女別の中等教育機関であった高等女学校について「裁縫、料理の修得、良妻賢母主義では高等下女の養成」と批判した。また、「東北帝国大学の女子への開放は女子高等教育の方向性」であるとし、女性への「高等教育授与は精神的、経済的自立の鍵」と説明し、女子高等教育拡充の必要性を述べている。

#### 4. 子ども本位の家庭と安部磯雄の家族たち

安部は子どもの権利についても先駆的だった。P.アリエスが指摘しているように、「子ども」は歴史的な概念である。人間の社会の中で保護され、発達可能性を秘めた存在としての「子ども」の発見には長い時間を要した。産業革命期においても子どもは労働力と見なされ、キリスト教、社会福祉、社会主義など各領域で児童救済が社会の課題となった過去がある。学校教育制度の整備も、当初は児童救済としての側面がその目的にあった。日本の場合は、伝統的な「子宝」思想の一方で、「餓鬼」、「間引き」、「身売り」などの事実も存在し、貧困や家制度の中で子どもが犠牲にされてきた歴史がある。

安部は「先ず虐待より彼等を救へ」、「子供は絶対に家庭を要求す」など、子どもの権利の擁護を主張した。また「子供は天性自由を好み活動を愛する」、「子供の位地に立て考へよ」など児童中心を訴えた。さらに「兄弟姉妹間に階級的差別を設くべからず」、「男女児に平等の機会を与ふべし」など家庭内での平等を主張し、「体刑を加ふる必要なし」と体罰を否定している。

安部自身、妻を敬愛し、子どもたちの個性を尊重する家庭を築き、子どもたちは日本のスポーツや芸術、学術などに貢献する人材として育った。安部の妻、駒尾は1867年に生まれ、18歳で安部と婚約するが、婚約中に神戸女学院、梅花女学校に進学し、婚約から10年後の28歳で結婚をした。磯雄にとって駒尾は妻であるとともに、いかなるときにも対等な友であり、常に敬い合い、人生を通じて膨大な手紙をやり取る存在だった。2人は8名の子どもを設けたが、男女の区別なく全員に高等教育を受けさせている。

安部の家族たちを紹介したい。長男の民雄は、後に早大教授となり庭球部長を務めたが、全日本庭球選手権で優勝、ウィンブルドンに出場した日本を代表するテニス選手だった。1931年にアメリカ人女性テニス選手ヘレン・ウィルス・ムーディーが来日した際には、共に早大コートでプレーして日本の女子テニスの普及に貢献した。民雄の妻の豊子は、姉の溝口歌子とともに大正期に日本の初代ガールガイド（ガールスカウト）として活動した。豊子・歌子は新発田藩主溝口直亮の娘、徳川慶喜の曾孫にあたる。歌子にはイギリス留学の経験があり、戦前のNHK海外放送を担当し、戦後は『英語論文の書き方』を出版し、科学英語の普及に貢献した人物である。戦後、新しい青少年教育の方法を普及したIFEL（青少年指導者講習）に関わり、科学教育や青少年教育への影響は多大であった。次男の道雄は数学者でバイオリニスト、妻の和子はドイツ留学経験のあるピアニストだった。道雄の恩師、小野アンナは日本のバイオリニスト生みの親と言われる人物であり、磯雄の孫となる名取牧子、中原浩子、大賀（松原）緑は音楽家として活躍している。

安部磯雄の孫の松原（大賀）緑についてのエピソードを紹介したい。緑はピアニストであり、ド

イツ留学をともにした大賀典夫（後、ソニー会長）と結婚しているが、多くのピアニスト養成にも貢献した人物である。彼女は、第二次世界大戦中は少女だったが、軽井沢に隔離疎開の身であったユダヤ人ピアニストのレオ・シロタ、レオニード・クロイツァーのもとに通いピアノを学んでいた。それ自体、安部磯雄の文化尊重と国際交流を受け継いだ話だと思う。ところで、このレオ・シロタの娘がベアテ・シロタ・ゴードンである。ベアテは日本の敗戦直後に GHQ 民生局スタッフとして来日し、日本国憲法第 14 条 1 項「法の下での平等」と第 24 条「家族生活における個人の尊厳と男女の平等」の草案起草に関った人物である。

ベアテは 2000 年 5 月参議院憲法調査会参考人として来日した際に「日本の進歩的な男性と少数の目覚めた女性たちは、もう 19 世紀から国民の権利を望んでいました」と証言し、憲法はアメリカから押し付けられたものという見解を否定した。この「進歩的な男性と少数の目覚めた女性たち」の中には、安部磯雄たちの姿も見えてくる。安部は学生スポーツや文化活動にも力を尽くしたが、彼の思想と人的交流の成果は、様々な形で日本社会の発展に寄与している。

## 5. おわりに—早稲田大学における多様性の尊重と個性重視

キリスト者であり社会主義者、婦人解放論者でもあった安部の思想と行動は、当時の日本社会ではかなり急進的に映ったであろう。その彼を早稲田に迎え入れた大隈の意図はどこにあったのだろうか。官学に対抗して私学を設立した大隈が重視した言葉に「倜儻不羈の気象（てきとうふきのきしょう）」がある。これは強い信念と独立心を持った並外れた才能を意味する。教育には人類が蓄積した知を次世代に伝達するとともに、一方で、現在の社会を改革しうる個性を育てるという目的がある。大隈は、近代化の名の下で教育が矮小化されることへの危機感を抱き、学生が広く社会で活躍するためには自由な思考とリーダーシップの育成が不可欠と考えていた。安部の招聘も、彼の国際的な経験に裏付けられた見識と「世界に目を向けて心を開く」という姿勢に期待したと考えられる。

早稲田大学教旨には、学問の独立と並び、個性の尊重、自由討究、独創の研鑽が掲げられている。創立期から本学を支えたのは、安部に限らず、異端とも見えるような独創的で多彩な人々だったことを想起したい。現在でも、互いの個性を認め合って成長できるのが本学の魅力である。早稲田大学がダイバーシティ推進を掲げる意味について、今一度、皆さんと考えていきたい。

### 参考文献・引用文献：

- 安部磯雄『婦人の理想』北文館、1910年。
  - 安部磯雄『子供本位の家庭』実業之日本社、1917年。
  - 安部磯雄『社会主義者となるまで』改造社、1927年。
  - 片山哲『安部磯雄伝』毎日新聞社、1958年。
  - 早大社会科学研究所『安部磯雄の研究』1990年。
  - ベアテ・シロタ・ゴードン『1945年のクリスマス』柏書房、1995年。
  - 山本尚志『レオ・シロタ』毎日新聞、2004年。
  - 矢口徹也『女子補導団』成文堂、2008年。
  - 井口隆史『安部磯雄の生涯』早大出版部、2011年。
- 写真提供は、早大出版部。